

物事を見る視座をつかむ

総合政策学部 植松歩美

「少年老いやすく、学成りがたし」とは先人の言葉であるが、入学した時に思い描いていた学生生活、挑戦しなかったことの半分も成し遂げられぬまま、4年という月日はあつという間に流れた。

学生記者として活動していたのは、1年生の終わりにメンバーに加えて

いただいたから、就職活動が本格化する3年の春休みまでなので、実質2年間。しかし、この2年間の記者生活のなかで、私は普通に大学生活を送っていたならば、出会えなかった多くの人に出会い、多くの場所に行き、かけがえのないものを得た。

ここで、記者時代の印象的なエピソードを振り返ってみよう。書いた記事の数は、そう多くはないが、どれも忘れることができない体験である。

- ・哲学科N教授に文学部大教室で名指しされる。
- ・「赤プリ」デビュー。
- ・記者仲間Oさんとの学食取材。

「哲学科N教授」から。N教授との出会いは、連載企画『講義の風景』で授業を取材させていただいたことがきっかけである。

哲学に関心があった私は、N教授の講義の内容そのものの魅力と、その合間に差し挟まれる自虐的且つシュールな言動に

魅了され、3年次には通年の「哲学」の授業を履修した。ほぼ文学部生しかいない大教室で、何かあると、「植松さん、いますか？」とN教授から声をかけていただいた。（ちなみに先生に「好きな画家は誰か？」と聞かれ、「エル・グレコです」と答えたことが、鮮明に脳裏に焼きついている）

私の「赤プリ」デビューは、取材に向いた「新司法試験合格者祝賀・激励会」が赤坂プリンスホテルで行われたことで果たされた。

この取材は、私が初めて、事前にアポ取りしていない相手に取材をする、いわば「突撃」インタビューであったという点でも印象深い。

「Hakunon ちゅうおうの学生記者、植松です」と名乗りながら、これこそが記者であると感慨にふけったりしたものである。

取材では、未来の法曹人の口から語られる、経験に裏付けられた「想い」に身が引き締まる思いだった。

もちろん、取材後にもおいしい食事にもありついた。

記者仲間Oさんとは、当時の編集長に「問題

児」として括られていた感があるが、学生生活を通じて良い友情を育んだ。そういう私たちが2人で手を挙げたのが学食取材で、有名大学の学食を食べ歩き、ミシユランよろしく、「星」で評価するというものだった。普段は、あまり行くことができない他大学で、中大とは異なった雰囲気味わい、そのときは楽しいのだが、戻つてくると、やはり母校の空気にホッとした。そういえば、某国立女子大学では、身分証の提示を求められた。性別はクリアしているはずなのに：。

私は学生記者としての経験を通じて、物事を少しだけ違う角度から見ると、そんな視座を手に入れたように思う。普通の人生も、少しライトの当て方を変えれば、きつときらきらと輝く。現に、私は取材を通じて、たくさんの中大生の「きらり」と光る瞬間を見た。

私の大学生活での最大の財産は、「恩師」と呼ぶことができる教授に出会えたことである。先生は、あるとき「学問をする」ということについて、次のように仰った。「学問を、研究をするということは、真つ暗で長いトンネルの中を自分のもつ蠟燭



学生記者

ニュース

のか細い光だけを頼りに一步一步進んでいくようなものである」と。

私は恩師に教えられた道を歩むことを決意した。往生際悪く、就職という決断を覆し、両親に多大な負担と迷惑をかけて、大学院への進学を決めたのである。恩師が諭す道を目指し、進んでいくことを決意したこ

「学生」が外れ、「新聞記者」になる

総合政策学部 滝沢孝祐

幼い頃から新聞が好きだった。伝えることが好きだった。そして、人と出会うことがなによりも好きだった。

今から4年前の春のこと。何の



とが、私の学生生活において最後にして、最大のニュースであるといえるだろう。何やら、前編集長のお小言が聞こえてきそうではあるが・・・。
いま窓の外は、春の風である。

'08年春 最後の〈私〉

ことに驚き、藤沢市の遊行寺周辺でCの旗を持つ人に片っ端から話を聞いた。その中にはかつて箱根駅伝に携わった陸上部OBの姿もあった。そして3年目には、ハコネを巡る地主さんと中大学員との物語を書いた。

取材を通じてたくさん生き方も学んだ。パラリンピック金メダリストの大日向邦子さんは、「大変さはもちろんだけれど、障害は私の個性。障害者であることを受け入れることで、前向きな生き方ができるようになりました」△06年夏季号▽と力強く語った。「自分のことをしっかりと

できない人間は、他人に対して何もできないと思うのです」とは、高校教師になった鈴木有美さんの言葉だ△05年早春号▽。

仕事を辞めて一念発起して法科大学院に通った学生、パニック障害と闘いながら卒業した学生、起業を目指す学生、異国の地で子育てをしながら必死に学ぶ学生など……一人ひとり違う学生生活がそこにはあった。「大学で学ぶことに即効性はないと思うんです。しかし、絶対にどこかで役立つ」と熱く語ったのは、社長

を務めながら4年間無欠席で大学に通った中村孝さん（当時56歳）だ△05年早春号▽。

鈴木敏文理事長は「卒業生には法曹界だけでなく実業界、スポーツ界でも活躍している人が多い。中大生は、もともと自信をもっているはずだ」と語っている△06年春号▽。

取材を通じて、気がつく中央大学が好きになっていた。そして中大生であることに大きな自信を持つようになった。スポーツ、学問、サークルで活躍する学生、中大を支える教職員、学び舎を巣立ち社会で活躍する学員にも一人ひとり違った中大への熱い想いがあることを感じながら。

ふとしたきっかけで『Hakumon ちゅうおう』の活動がNHKに取り上げられた際に、ちよつとだけ生意気なことを言った。「人の泣いている姿だとか、笑っている姿だとか、喜怒哀楽の感情に寄り添い伝えられる記者になりたい。また、自分が書くことで人が動くきっかけになったら、読者が元気になれる記事を書いていきたい」と。

この春、学生記者から本物の記者になる。